

出会いヶ原の合戦 in 弘前 ～地産地活で Go!Go!!Go!!!～

弘前大学人文学部 小谷田ゼミ

木村 慎之助

石村 公英

柴田 周平

乗田 結莞

萩原 拓真

百沢 辰哉

山崎 健也

1 はじめに

現在、日本の人口は減少傾向となっている。この傾向は青森県にとっても同じであり、人口減少の問題は深刻化している。原因として考えられることは死亡者数の増加、県外への流出、出生数の低下である。

出生数の低下は本県における未婚化・晩婚化傾向に端を発しているのではないかという点が我々の問題意識である。

そこで問題解決へのアプローチとして、結婚に至るプロセスの出発点である男女の出会いに焦点を当てた。男女交際の現状が抱える問題を考察し、出会いの場を創出するために実践活動を実施した。そして活動から見えたいくつかの課題を克服し、男女交際の活発化を達成し得る仕組みを提案するものである。

本研究では青森県における人口減少問題の現状と課題を述べ、問題解決へのアプローチを示す。次に我々の実践活動を踏まえた考察を行い、最後に問題解決の具体策の提示・活動のフィードバックを行う。

2 人口減少問題

(1) 青森県における人口減少の現状

本県における人口の推移は減少傾向となっている。特に平成以降の減少は顕著である。平成17年から平成22年の5年間で年平均1万人ずつ減少しており、これは大鰐町に相当する規模である。つまり毎年1つの町が消えていることになる。

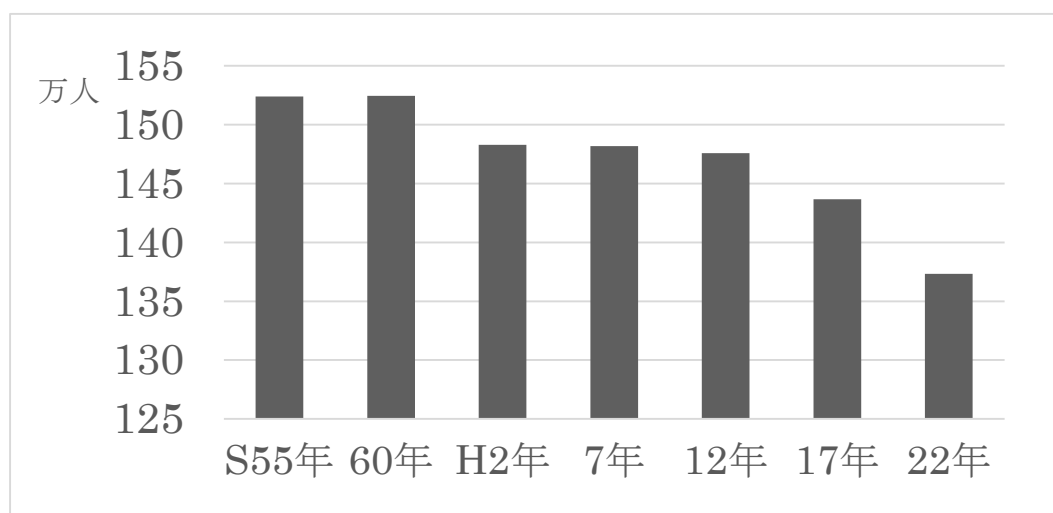


図 1 青森県における人口の推移

出典：総務省『平成22年国勢調査人口等基本統計結果』

(2) 人口減少の原因

人口減少の原因としては死亡数の増加、県外への人口流出、出生数の低下が考えられる。近年の少子高齢化によって死亡数が増え、子供の数が減ることが人口の自然動態の減少傾向へと繋がっている。また、進学・就職の時期に県外への進出が見られ、本県の

転入数よりも転出数が上回るため人口の社会動態も減少傾向となっている。そのため少子高齢化と人口流出が人口減少に拍車をかけていると考える。

(3) 未婚化・晩婚化の問題

我々は人口減少の原因の中で出生数について着目した。全国の出生数と合計特殊出生率の推移は図2の通り軒並み右下がり傾向にある。昭和48年には出生数が200万人を超えていたのと比較して平成25年には100万人をわずかに超えるほどに落ち込んだ。また人口を維持する合計特殊出生率は2.08であるが、平成25年では1.43と大きく割り込んでいる。また子供を出産するためには結婚していることが前提になる。そこで本県における出産適齢世代男女の未婚率に焦点を当てると、未婚率は上昇している。少子高齢化の原因として未婚率の上昇に裏付けられるように未婚化・晩婚化が指摘できる。

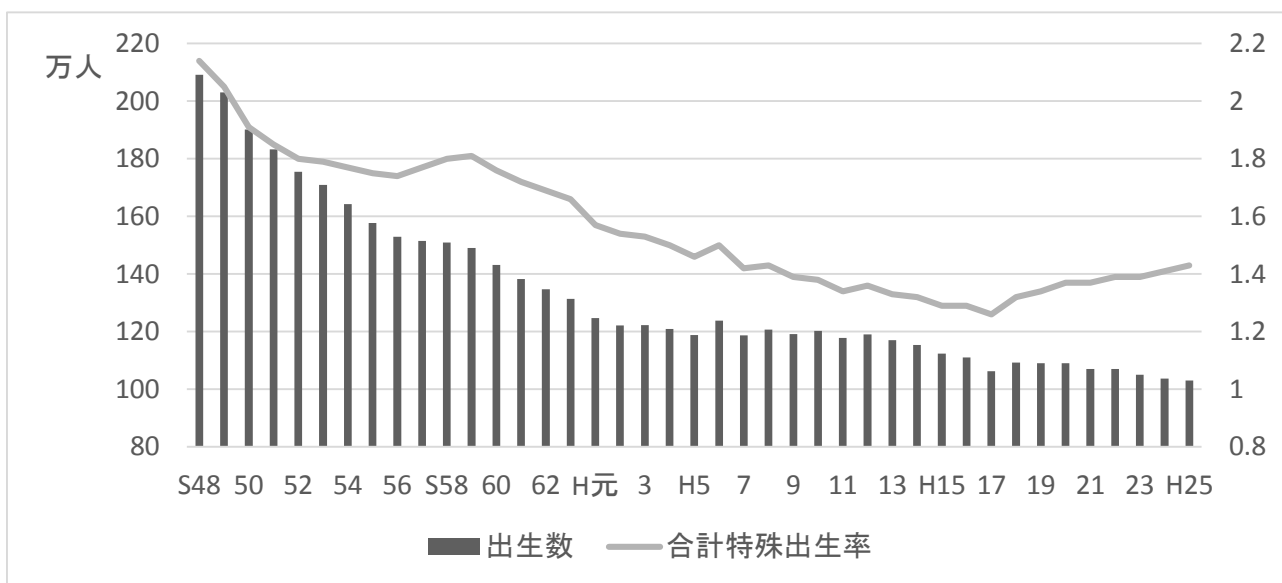


図2 全国の出生数と合計特殊出生率

出典：厚生労働省『人口動態統計』

男性(%)	25～29歳	30～34歳	35～39歳
平成12年	64	40.3	26.2
平成17年	66.7	44.2	31.7
平成22年	69.5	47.7	36.3
女性(%)			
平成12年	48.9	24.2	12.6
平成17年	53.3	29.3	18
平成22年	56.3	33.6	22.6

図3 青森県の結婚適齢世代の未婚率

出典：厚生労働省『人口動態統計』

(4) 出生数を増やすには

① 男女の出会い

これらを踏まえたうえで、出生数を増加させるためには結婚の早期化、早い段階から男女が出会う必要性があるのではないかと我々は考えた。つまり、本県における人口減少の根本的原因は「男女の出会い」にあるのではないかというのが我々の問題意識である。

3 男女交際の不活発

(1) データ

現状の男女交際を青森県ウェブアンケートあおもりサーチにおいて実施されたアンケート結果（図 4、5）を参考に分析していく。恋人がいない人の中で恋人が欲しいと思うかの質問に対して半数以上が「欲しい」と回答している。これは恋人が欲しいものの恋人がいないことを示している。この原因に関して我々は男女の出会いの場自体が不足しているのではないかと考える。また趣味をテーマにした婚活イベントがあるとしたら積極的に参加したいと思うかの質問にもおよそ半数が「思う」と回答している。このニーズに対して既存の婚活イベントが対応できていないことが読み取れる。

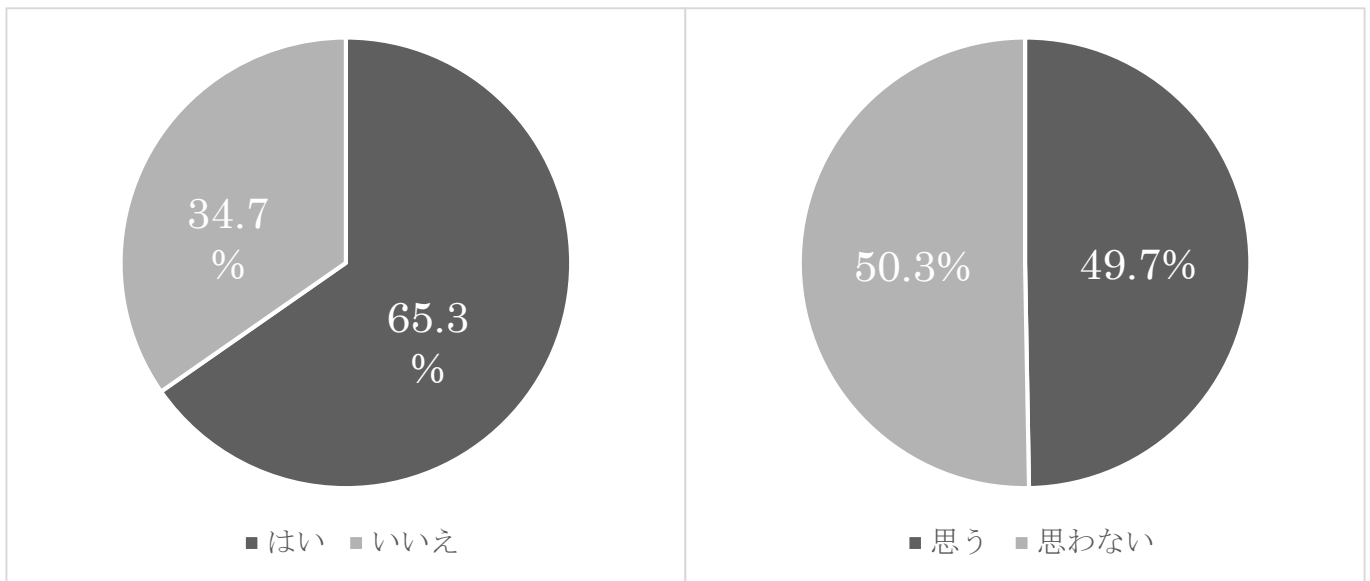


図 5 (恋人がいない方で)
恋人が欲しいと思いますか。

図 5 趣味をテーマにした婚活イベントがある
としたら積極的に参加したいと思いますか。

出典：青森県企画政策部統計分析課『青森県ウェブアンケートあおもりサーチ』

(2) 先行事例

① ひろさき出愛サポートセンター

弘前市では男女の出会いに関する支援事業としてひろさき出会いサポートセンターという組織がある。本組織においては独身者の出会いの場を創出すること、婚姻者数の増加及び結婚に対する意識の高揚を図ることを目的として市内在住独身者向けに

出会いの場を提供している。会員制の組織であり1対1の男女マッチングや婚活イベントの企画や会員への情報発信を行っている。

② 婚活イベントの問題点

問題点は大きく分けて運営面と参加面の2点が挙げられる。運営面では会員数の不足が大きな問題である。会員不足の問題は会員同士の要求の不一致という問題を引き起こしている。会員を増やすことはパートナーの選択肢を増やすことにつながるのでこの問題の解決は急務である。参加面の問題は内容が飲み会中心となりマンネリ化してしまっていること、1回きりの単発イベントが多くお互いの距離を詰め切れないということが挙げられる。また、参加費用が参加者にとって負担に感じる価格帯に設定されていることや、イベント情報が点在しており、イベントの存在自体を知る機会がないことも指摘できるだろう。これらの問題がイベントへの参加ハードルを高めている。

4 問題解決へのアプローチ

(1) アプローチ

① 地産地活による新たな出会いの提供

我々は「地産地活による新たな出会いの提供」というテーマを掲げて問題解決にアプローチをかけた。前述したように本県においては出会いの場が不足しているという課題がある。さらにイベント内容や参加費などの問題が婚活イベントへの参加ハードルを高めているという課題もある。そこで課題解決のために、新たな出会いの場の創出や地域の社会的活動を利用し参加ハードルを下げることを活動のテーマとした。

② 最終目標

我々の最終目標は男女交際を活発にさせることである。そのためには次のような取り組みが必要であると考えます。まず、既存の婚活イベントを活かすために宣伝活動に力を入れ活動の周知を徹底する。また、個々人の趣味になり得るものや社会活動をテーマに設定したイベントの企画・開催を行う。そして、イベントを行う際には既存の地域イベントを活用し、それらのイベントに参加することで参加者自身の所属コミュニティ拡大へと繋げる。この3つの取り組みが達成される仕組みを形成することで最終目標の達成を狙うものである。

(2) 期待される効果

① 直接的効果

この仕組みを形成することによる期待される主な効果は3点ある。1点目として、個々人の趣味や社会活動をイベントのテーマとすることで、参加へのハードルが下がることである。2点目としてはイベントの開催情報を集約することでイベント参加希望者にとって出会いの場に関する情報の入手が容易になることである。そして3点目としては参加者自身の所属コミュニティが拡大することで、男女の出会いの機会が増

加することが考えられる。

② 派生的効果

上記の効果から派生する効果としては以下の3点が考えられる。地域のイベントや社会活動を出会いの場として活用することによって地域の活性化に繋がるであろう。また、自身の趣味・友人作りがもたらす新たな生きがいを発見する機会になる。そして男女交際を通じて出来たパートナーの存在が長生きの要因になるという調査結果からも、本取組みを通じた長生きの実現も期待される。

5 実践活動・インタビュー

(1) 実践活動

① 活動内容

実際の活動として、スポネット弘前が行っている活動に参加させていただいた。ひろさき出愛サポートセンターの会員に向けて情報を発信して参加を呼びかけ、2015年11月15日(日)に弘前市立城東小学校で卓球・ラケットテニス、11月22日(日)に弘前東中学校でバドミントンを行った。また、ひろさき出愛サポートセンターへのインタビューや弘前商工会議所の協力の元、弘前合コンリーグへのボランティアも行った。

② イベントの宣伝

ひろさき出愛サポートセンターの会員に情報を流すために、卓球・ラケットテニス、バドミントンの二種類のチラシを作製し、ダイレクトメールにより参加を呼びかけた。印刷したものは弘前商工会議所、まちなか情報センター、ヒロロ、市民参画センターに50部ずつ置き、ポスターにしたものを弘前大学の各学部の掲示板に貼ることでひろさき出愛サポートセンターの会員以外の参加も募った。

③ 活動目的

これらの活動の目的は、スポーツをテーマにした出会いの場は本当に必要があるのかを知ること、そして参加者へのインタビューで生の声を聞くことである。

④ 当日の流れ

当日は、活動が始まる10分前に集合してもらった。そこで私たちの活動の趣旨を説明し、自己紹介を行ってから実際に活動に移った。活動終了後には事前に準備したアンケートを記入してもらい、口頭でのインタビューにも回答してもらった。

(2) インタビュー

① 交際発展の事例

スポネット弘前の会員のうち、バドミントンの活動を通して交際に発展した方にインタビューを実施した。その方は、仕事終わりにできる趣味が欲しいということから本活動に参加し、毎週の活動の中で徐々に親睦を深めて交際に至ったということであ

る。趣味をテーマにした活動は共通の話題があるため、きっかけを掴みやすいという旨の発言もあった。このようなことから、我々の活動には価値があるのではないかと考える。

6 考察

(1) 活動を通して

① 良かった点

このスポーツイベントの参加者にインタビューを行った結果、この活動の良かった点として、参加者自身の持ち味が発揮できることやスポーツをする絶好の機会になる、共通の趣味によって人脈形成や友人作りの良いきっかけになる、定期開催によって参加者との関係を自然に継続できるという4点が挙げられた。特に共通の趣味を通じた活動に参加することによって、新たな人脈や友人といった新たな関係の構築につながる、また定期開催イベントへの参加は自然な流れの中で親睦を深められるという意見は、我々が提案した趣味をテーマにした婚活イベントに価値があると言える根拠になる。

② 要望

この活動に対する要望としては、男性は1対1のマッチングを希望するが、女性は複数人でのマッチングを希望しており、男女間で希望する出会い方に違いが見られた。また、社会人の都合を考慮した日程・時間を設定した上でのイベント開催を求める声や、参加者募集のためには適切な時期に余裕を持った情報を発信する必要がある、新規参加者が既存の参加者に対して抵抗を感じないためのイベント運営の際の配慮が必要ではないかという意見も挙げられた。

(2) 問題点と解決策

① 問題点

我々は今回の活動について参加者の少なさ、参加者の男女の比率の2点が大きな課題であったと考える。ただ、男女の比率については、参加者の人数を増やさなければ調整できないので、参加者の少なさを改善することで、男女の比率の調整も可能になる。

② 改善策

そこで、上記の問題点に対する我々の改善策は点がある。1点目は、地元の人々の認知の増加である。活動自体を知る人が増えれば、参加者数も増加するのではないだろうか。2点目は、参加者そのものを増やす工夫をすることである。例えば、会社や役場など結婚を希望する人がいる所に情報を流す、会社や役場が結婚希望者に対するバックアップを行う等がある。この2つの軸に沿って本研究を通じた我々の提言を以下に述べていく。

(1) これまでの流れ

① これまでの流れ

これまでの流れを整理する。本県の人口減少の問題点として我々が着目したのは出生数の低下である。また、子供を産むためには結婚した男女が必要である。その結婚において出産適齢世代の未婚化や晩婚化が危惧されているが、その根本的な原因は、男女の出会いの不足、既存の婚活イベントの限界にあるのではないかと考えた。そこで大学のサークルという組織や活動形態、雰囲気を手掛かりに、個々人の趣味になり得るスポーツをテーマにしたイベントを探し、そこに参加者を募ることを試みた。しかしながら、告知期間が短かったこと等の理由により、期待したほどの参加者は集めることができなかった。我々が実施したスポーツイベントから見えてきたことは、当該地域で開催されているイベントの認知度を向上させること、参加者そのものを増加させる工夫の必要性が高いということである。

② 活動を通じての問題点

繰り返しになるが、これまでの我々の活動からの問題点として、第1にイベントへの参加者が少ないことが挙げられる。これは告知の方法や時期の問題もあるが、やはりイベントの認知度が低いことには参加者を募ることは難しい。この点に関しては、告知の方法をチラシやダイレクトメール以外に行えなかったこと、早めの告知を行うための準備が足りなかったことなどの我々の反省点もある。

第2に、必要な情報が必要な人に届かないことである。仕事が忙しく自分の時間がなかなか取れないなど、出会いの場が職場に限られてしまう人等にイベント情報を届ける必要がある。そのために情報を不特定多数ではなく対象を定めていく方がいいのではないかと考える。

第3に、未婚の男女、特に若い世代の恋愛や結婚に関する危機感の希薄さが指摘できる。仕事や趣味を優先してしまい、いざ恋愛や結婚を考えたときに、手遅れということも考えられる。その予防策として、イベント等を通じて自身の人脈形成や交友関係を広めておくことが大事になってくる。

(2) 提言・課題・成果

① 提言

ここで我々が提言として掲げるのは以下の3点である。1点目は企業に対しての直接売り込み。2点目はひろさき出愛サポートセンターのホームページの環境整備。3点目は学生スタッフの導入である。企業への売り込みは我々の考える問題点を踏まえて、職場に情報を直接提供するものである。方法としては、今までのひろさき出愛サポートセンターの仕組みを広げることを考えている。従来の仕組みは、イベントを行う協賛団体とサポートセンターがイベントの情報を共有する。その情報を、登録をした会員に対してサポートセンターがメールマガジンやダイレクトメール等で発信する。それを見た会員がイベントに参加するというものである。この仕組みのサポートセン

ターの役割を拡張することを考え、協力してくれる新しい企業等に情報を送る。この情報を見た企業の従業員がイベントに参加、そしてひろさき出愛サポートセンターへの会員登録につながることを期待する。

次に、センターのホームページ環境を整えることで、不透明さの払拭や認知度の上昇を目指す。主に、これまで開催されたイベント情報や写真を掲載し、会員だけでなく非会員でも情報を入手できる環境にしたいと考えている。

そして、センター内に学生スタッフを採用し、若者の目線を取り入れることで、多様なニーズへの対応を可能にする。具体策としては、弘前大学の学校祭で学生スタッフが恋愛・結婚に関するブースを設置し、セミナー等の開催を行う。また、学生が企画・運営に携わることによって、若者の意識改革を図る。

② 将来的な展望

先ほどの提言が実現された場合、人口減少問題の克服への道筋は以下に示すとおりである。まず、イベント情報の広がり・認知度の改善を出発として男女の出会いの場が増加する。増加した機会に参加者が実際の活動を通じて男女交際の活発化を見込む。そこから、結婚へと繋がっていけば未婚化・晩婚化の改善、ひいては出少数の増加による人口減少問題の克服の実現を期待している。

③ 残された課題

しかしながら、継続して考えていかなければならない課題が主に3点挙げられる。第1に、男女比の片寄りである。男女の出会いの場を増加させたとしても、男女比に片寄りが出てしまうと、効果が減少する危険性がある。第2に、企業は恋愛・結婚の支援に費用が掛かることが挙げられる。企業は、情報を告知したとしても育児休暇や産後休暇などの従業員手当を負担する必要があるため、すべての企業が前向きに新しい仕組みを考えることは難しい。第3に、情報発信の範囲を広げ、参加者が増加することで、参加者の情報を把握しきれないことがある。そのため、現在よりイベント参加者の不安が増加することが考えられる。

④ 成果

我々の活動を通じて得られた成果は、ひろさき出愛サポートセンターとスポネット弘前を引き合わせられたことにあると考える。今後は、スポネット弘前のイベントの情報をサポートセンターに提供し、新たな出会いのイベントとして活用して頂けることになった。また、これら2つの組織と我々が話した際には、冬のリレーマラソンで婚活部門を設定したイベント開催などを共同で実施するアイデアが話題に上がり、深い連携が成されると期待している。

弘前商工会議所青年部にも情報を提供すると、その情報を流してくださるという意見をいただいたので、今後もひろさき出愛サポートセンターとスポネット弘前以外の繋がりも期待される。人々の居場所、コミュニティー作りを様々な人の、それぞれのケースに合わせて作っていく必要がある。そのために、学生、行政、企業が一体となり、周囲に情報を伝える機会を増やすことを継続的に行わなければならない。

8 調査研究に参加しての感想

石村公英

本プロジェクトを通じて痛感したのはいかに自分の住んでいる地域について私が無知であったかということである。人口減少問題の深刻さや、その影響について当初は十分な理解がなく、プロジェクトを進めるに際して非常に苦勞した部分である。しかし、情報を自分たちで収集し、検討していく中で何が不足していて、不足部分に対する必要なアプローチを考えるということは今、私たちが住んでいる地域に対して真剣に考える良い契機になったと感じている。もちろん、私たちだけではここまで真剣に本県と向き合うことは出来なかつただろう。プロジェクト参加の機会を与えて下さった青森県庁の方々を始めとして、ひろさき出愛サポートセンター、青森出会いサポートセンター、スポネット弘前の担当者の方々、アンケートに協力してくれた方々、ゼミの担当教員である小谷田先生にはこの場を借りて感謝申し上げたい。

木村慎之介

今回の活動を通じて、自分の人間力を高めることが出来たと感じています。プロジェクトを考え、実践し、まとめるという試行錯誤をした経験を通して、考える力というものを養うことが出来たと思います。フィールドワークでは想定とは違ったことが起き、その度に自分たちどのようにすれば自分たちの考えていることが実現できるのかを考えなければならぬ状況に身を置くことが出来ました。その結果、常にアンテナを張ることができ、思考力を深めることが出来たと思います。また、今回のプロジェクトを通じて様々な人に出会い、その人の価値観に触れることでプロジェクトのスタート時と比べて人間的にも成長できたと感じています。このような機会を与えて下さった青森県庁さんには感謝しています。また、プロジェクトに協力して下さいました皆様に感謝を申し上げたいと思います。

柴田周平

このプロジェクトを通して、自ら考え自ら行動する貴重な機会を得ることができた。実際にイベントを開催してみるとうまくいかないことが多く、アイデアを理想通りに実現することは難しいことだと感じた。今後の大学生活、社会人生活にこの経験を活かしていきたい。

乗田結莞

今回の活動が無ければ、本県の課題を本気で考え、解決するために実際に取り組むことは出来たと思います。社会人の方と関わり、地域の方と触れ合い、改めて人の温かさや、本県の魅力を感じられる良いきっかけとなりました。思い通りの成果が得られず、悩んだこともありました。しかし、活動を通し、考えを行動に移すということがどれだけ自分を成長させてくれるのか身をもって学ぶことが出来ました。我々の取組みが今後も継続し、本当に成果のあるものになることを願います。たくさんの方々の協力があってこそその活動でした。本当にありがとうございました。

萩原拓真

今まで、このような活動をしたことがなかったので、貴重な経験ができました。インタビューやフィールドワークも初めてで、この活動がなかったら、出会えなかった人たちもたくさんいました。途中で行き詰ることもあり、色々苦労しましたが、協力してくれた人たちがとてもいい人たちで、この県の人々の温かさも感じることができました。この経験を、社会人で生かしていきたいと思います。また、今回の活動は、たくさんの人たちのご協力があったからこそ、成し遂げることができました。ご協力してくれた皆さん、ありがとうございました。

百沢辰哉

この活動を通じて感じたことは、普段の大学生活では学ぶことのできない経験ができたということです。インタビューやフィールド実証などの現地での活動では、実社会で働く大人の方々と触れ合う機会が非常に多く、いろいろな場面で刺激をもらっていました。このような刺激から、自らの成長を感じられたことと、紆余曲折を経ながらも、なんとか自分たちの考えていたことを形にできたことには大きな達成感を感じています。また、我々の活動に最後まで全面的なサポートをしてくださった、関係者の皆様、特にスポネット弘前さんや弘前出愛サポートセンターさんにこの場を借りて感謝申し上げたいと思います。

山崎健也

県庁プロジェクトに参加することで、地域の人々、社会活動に関われたことは、とても良い経験になりました。これまで、地域社会とかかわる活動には、あまり参加していなかったので自身の視野を広げるきっかけとなりました。地域の課題について、様々な世代や職種の方々と協力し、考え、実施する。その活動の一員として関われたことを大変うれしく思います。このような機会を設けて頂き、ありがとうございました。是非、今後もこの活動を続けて頂けると幸いに思います。